

『話し合いが変わる 地域でアクションリサーチ』

平井 太郎 著

農業・農村領域 主任研究官 佐藤 孝一



『話し合いが変わる 地域でアクションリサーチ』
著／平井 太郎
出版年／2022年
発行所／農山漁村文化協会

本書は、著者が青森県内の各地で地域づくりに携わるなかで、現場の人たち、行政や専門家と試行錯誤を重ねてきた実践と理論の書です。現場の人の話し合いと実践を進めながら、アクションリサーチの理論に注目し、地域の将来像にどう進んでいったらよいか、そのプロセスを解いています。

本書の構成は3部構成になっています。第1部「現場とともに地域を変える方法論」（第1章～第3章）、第2部「アクションリサーチを立ち上げる」（第4章～第6章）、そして第3部「アクションリサーチを持続させる」（第7章～第9章）です。

以下で、簡単に各部の内容を紹介します。

第1部では、アクションリサーチはどのようなものかを紹介しています。アクションリサーチという研究は、1940年代にアメリカで生まれ、現場の試行錯誤を重ね、知恵をどう引き出すかを解き明かす考え方です。アクションリサーチの考え方で重要なのは、望ましい姿が何であるか＝knowing-what解答以上に、望ましい姿へのたどり着き方＝knowing-how解法です。つまり、どうしたらその解答にたどり着くかの解法が重要ということです。さらに、著者はアクションリサーチと、日本の農村で取り組まれてきた「生活改善」「生活改良」の類似性を確認しています。生活改良の取組を振り返ることで、アクションリサーチの要点を整理し、日本の農村であらためてアクションリサーチが必要とされているといえます。アクションリサーチはワークショップを積み重ねることによってかたちづくられていきます。そのためワークショップを積み重ねる際には、アクションリサーチの要点を省みることもなります。

第2部では、著者が青森県内の各地で地域づくりに携わった事例をもとに、アクションリサーチを紹介しています。紹介されている事例は、青森県弘前市旧相馬村地区の地域おこし協力隊（第4章）、青森県

の農山漁村「地域経営」事業（第5章）、総合計画や地方創生総合戦略（第6章）です、各事例の内容は、それぞ

れグリーン・ツーリズム施設の立て直し、若い世代のつなぎ直し、人口減少の抑制と違いはありますが、試行錯誤を重ねた話し合いが行われ、話し合いのテーマまた取組も自然に広がっていったことが紹介されています。また、各事例において、著者の研究そのものの転換点となった「専門家としてふるまわないからこそ受け入れられる」瞬間についても述べられています。

第3部では、第2部で取り上げた事例を振り返り、アクションリサーチを進めていくうえでのポイントを確認しています。そのポイントとは、①「目標をうまく共有する」（第7章）、②「尊重の連鎖」（第8章）、③「根をもつことと翼をもつこと」（第9章）です。これら3つの進め方＝解法を順に解説しています。

課題からではなく、まずありたい姿（将来像）を語り合い、それが重ねられ目標がうまく共有されれば、事業展開が生まれる。ありたい姿にもとづく目標に沿って試行錯誤を積み重ねることで「尊重の連鎖」が生まれるという。また、ありたい姿が語り合える場づくりのためには、女性や若者、非農業者や移住者といった周辺的存在の尊重も必要になります。

各地の現場において、政策づくりで話し合いが求められています。うまく進められている地域もある一方で、なかなか思うように話し合いの取組ができていないところもあると思います。本書で紹介された事例を参考に、自らの取組を振り返り、よい方向に進めるためにとても参考になります。また、本書で紹介された地域以外で試行錯誤を重ねて得られた解法も広く共有されることが期待されます。